

な協力によるものであった。

#### ⑩ 帝展第四部開設への動き

官展に第四部（工芸部門）を設ける運動については既に触れたが、一向に実現を見ぬまま大正十一年に至った。この年、本校教授黒田清輝が帝國美術院長に就任。工芸界の期待は大いに高まった。新聞はこれを次のように報じている。

帝展に第四部新設 明年から工芸美術を加へる

外國に無い日本の純美術獎勵、黒田院長の決意

日本畫、洋畫、彫刻の三部に限られて居る帝展に第四部を設けることが決定になつた、それは多年の懸案であつた工芸美術を收容することになつたのである、文部省公設展覽會の創始時代には先づ純正美術の獎勵を圖るに急であつたが日本の工藝には外國に其比を見ない立派な純美術的のものがあるから國費を割いて隆昌を期する斯る獎勵機關には當然加入すべきものであるとの主旨によつて美術工藝増置の運動は文展の中期から起つて今日に迫り現帝國美術院長黒田清輝子を會頭とする國民美術協會なども其の急先鋒であつた、處で黒田子が美術院長に新任したのは早天に雲霓を望んだ如く勇氣づいて學校派の津田信夫氏と民間派の赤塚自得氏は先般打揃つて院長を訪問し元來賛成者であつた立場から是非に其の盡力を乞うて承諾を得たのである、美術院では幹事の正木氏も賛成側であり福原審査委員長にも異存がないらしく其後都合に纏まつたと聞いたが經費や會場の關係で却々ウンと言はな

つた文部當局も院長幹事の説明で割合に輕少の費用でも事足り美術界の希望を容るゝことが出来るのを知つた結果急速に進轉して來年度の豫算に計上するまでに運んだのである、目前に迫つた今秋の帝展を限りとして明年からは四部制が實現されるであらう

經費は一萬圓位

正木直彦氏談

『帝展に工芸美術の一部を設けることになつたのは事實である此の問題は以前からの懸案であつたが機運が熟したのである、今春平和博美術館の工藝部で綜合鑑査を試みたのも豫め斯ういふ時期の到來を考へて行つたので相當の成績を挙げ得たから手心は判る、只會場や陳列棚新設備等の問題があるけれど現在の竹之臺陳列館を標準にしても百坪位の區劃を割けば可いのだし新設備といつても豫算年額一萬圓足らずの増加で濟むのだから來年は必ず實現が出来るといつても差支あるまい』

（大正十一年十月六日『國民新聞』）

こうした期待にも拘らず、次の記事が示すように、第四部設置は見送りとなつた。

工藝美術品の帝展入りは延期

豫算五萬圓削除さる

帝展に工藝美術作品を收容したいといふ望みは多年工藝美術家各團體からの意向であつたが文部省も黒田帝國美術院長新任と共に過般從來の三部制度に追加して第四部工藝美術豫算を計上し極力通過につとめたが大藏省で右豫算は削除されまた一年延期とな

つた なほ十二年度の帝展豫算は五萬四千二百七十二圓である

(大正十一年十一月十三日『東京日日新聞』)

この後、第四部設置運動の中心人物津田信夫は翌十二年一月に渡欧したがその不在の間、十二年十二月六日の帝国美術院臨時総会は満場一致で第四部の設置を府美術館完成後に実施することを決議。十三年七月には帝国美術院長黒田清輝が死去し、設置運動の前途が危ぶまれるなどのことがあったが、十四年十二月、津田信夫が帰国し、再度設置促進運動に取り組む。

